山崎郷土研究会報

No. 76
2. 9. 15
兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話 62－2000

近世初頭の山崎藩（三十四）

島田　清

二、池田輝澄時代（三十三）

○池田光政の忠言（続）

㈢、領主時代1（姫路・鳥取）

慶長十九年の冬、いわゆる大阪冬の陣が起こった。利隆は、開戦直前に、家康の密命を受けて領国に馳せ帰り、尼ケ崎城に兵を入れて建部政長を助け、大阪方に攻撃させなかった。そして、開戦と同時に姫路勢をひきい、岡山勢を引きつれた忠継とともに出陣した。このときの利隆・忠継の攻め口は大阪城北方戦線で、淀河を渡っての攻撃には多くの苦労があった。しかし、成功して大阪城北辺へ攻めこんだとき、和議が成立し、利隆・忠継は、それぞれ、姫路・岡山へ凱施した。忠継と、その母督姫が相次いで急逝したのはこの直後である。

忠継には嗣子がなかった。そこで、次弟忠雄を淡路由良城主から引戻して相続させた。忠雄が、襲封直後、輝澄・政綱・輝興の三弟に宍粟・赤穂・佐用の三郡を分け与え、近世山崎藩の成立がこのときに見られたことは既述のとおりである。

翌元和二年六月二十三日、姫路城主池田利隆が三十三歳で薨じた。

目　次

① 近世初頭の山崎藩（三十四）……島田　清…1
② 菅野物語（一）……志水出世…4
③ 茶道衆談義……堀口春夫…6
④ 上町村宗門改帳（一）……久保寅夫…8
⑤ 研修旅行に初めて参加して……柳田　弘…11
⑥ 安井清介氏の逝去を悼む……堀口春夫…13
⑦ 史跡部だより……15
⑧ 大雲寺の棟瓦……16
⑨ 事務局だより……17

嫡子光政は、漸く八歳になったばかりである。本領安堵を得て姫路城主となったものの、この年齢では、重要な姫路城主として、西国の押さえとなることはできない。幕府は、翌元和三年（一六一七）六月、光政を因幡・伯耆二国の国主として鳥取城に居らせ、石高も三十二万石に減じた。

これより、寛永九年（一六三二）までの十五年間、光政は鳥取に在城した。その間、鳥取城の増築（元和五年より七年まで）を行い、また、幕府の大阪城修築工事を手伝った。（元和六年、寛永元年）。

元和九年（一六二三）、将軍家光は上洛し、光政は随従した。光政は、このとき、十五歳になっていたので元服し、家光の偏諱を賜って光政と改めた。（これまでは幸隆）。また、四位侍従に任ぜられた。姫路城主本多忠政の嫡子で、将軍秀忠の嫡女千姫の婿となっていた忠刻の遺子勝子（母は千姫）を秀忠の養女として光政に嫁せしめる内命が出たのもこのときである。

祝言は、五年後の寛永五年（一六二八）正月二十六日に行われた。それより四年、寛永九年（一六三二）六月十八日に光政は岡山へ所替を命ぜられたが、寛永五年、因幡国鹿野城で起こった火災のため、池田家代々の記録や文書が焼失し、鳥取時代の光政の施政が詳しくわからないのは惜しまれる。

㈣、領主時代2（岡山）

岡山は山陽道の咽喉にあたる。そのうえ、鳥取とちがい、瀬戸内式の温和な気候で、地味も肥えている。領内貢租の実収も表高（おもてだか）を遥かに越え、鳥取とは比較にならぬ。早くから儒学に傾倒し、一身の修養と治道の工夫に余念のなかった光政にとって、この地は天与の地とも考えられた。しかも、父利隆が忠継に代って岡山に治城していた慶長十三年に岡山城内に生まれ、同十八年までの五年間在住した思い出の地である。二十四歳の青年領主池田光政は自らも精励し、また、多くの賢臣を登庸して、近世初頭の模範的領主となったのには、それなりの理由があったのである。

岡山における光政の治政は、藩主として直接に手を下した四十年間と、隠居後、なお、行政にかかわった十年間と、合計半世紀にわたる長期であった。その間、制度の確立から、社会・経済・土木・文教の各方面にわたってかずかずの業績をあげ、後世から、名君、あるいは賢侯とたたえられた。本稿では、これらの詳細を述べることはでき

健康づくりの相談が気軽にできる店
ごこう薬局
薬剤師　岸本八重子
岸本弘子
山崎町東和通り・☎(0790)62-1190

ないが、光政が、早くより学問の道にわけ入って自ら研鑽につとめ、高邁かつ熱烈な信奉者となっていたことは、あずかって大きな力になったであろう。

岡山藩主となってからの光政は、〝君主の儒〟に努めた。〝君主の儒〟というのは、「道を学んで独り己(おのれ)を修めるだけにとどまらず、天下をもって自己の任とし、そこに善政を敷くこと」を指す。その中の重要な一項であって、一個の人間に接し、あるいは、その言動を見聞して、その人の意図することとその人がらを的確にキャッチすることは、何よりも必要であった。光政は、天禀の才もあったけれども、年々の修学によって、早くからその眼力を身につけたのであった。

㈤、光政と輝澄

寛永八年(一六三一)、次弟の赤穂藩主池田政綱が病死したことから、三弟の輝興がそのあとを継ぎ、旧封の佐用郡が輝澄に加賜され、輝澄の封録は二倍に近い六万八千石となった。封録が増せば、それに見合う軍用を用意しなければならぬ。すなわち、家臣団を充実し、有事の際に備えねばならぬ。国家老の伊木伊織のほか、江戸家老として小河四郎右衛門を菅友伯の推せんによって召抱えたのもこのときである。

この年は、輝澄にとってありがたい年であったと同時に、まことに多忙、かつ、心づかいの多い年であった。しかも、翌寛永九年、参勤交代の定めに従って帰国するに当っては、秀忠から、家光の恩意のある旨を告げられ、幕府から、この年新しく鳥取藩主となった池田光仲の後見を命ぜられた。このため、輝澄は、帰国早々鳥取を訪ね、施政を検分するとともに、藩老荒尾但馬と種々打合せをした。江戸へ急出府を命ずる奉書が届いたのは、輝澄が山崎へ帰着してから間もないときであった。

出府の命は、駿府城十八万石の大名に輝澄を抜擢しょうという、破格の栄進を申し渡すためで、その内意も、ほぼわかっていた。このため、輝澄もその用意で出かけたのであったが、どうしたことか、道中で発病し、江戸藩邸に着いてからも頭があがらなかった。家光は、早速、見舞の使を出し、「十年は待つから気長に養生せよ」と温情ある命を伝えた。藩としては、一子虎之助を名代としてその命を受け、萬事の指図に従ったのである。

その後、輝澄の病気は徐々に回復したらしい。明確な記録はのこっていないけれども、虎之助が夭折したあと、輝澄は公式のつとめをするようになったとみられる。しかし、従前のごとく一人前のつとめができなかったことは、参勤交代の労を免除されて江戸定府の許しを得たことや、鳥取　岡山　赤穂の池田四藩主中の最年長者として、一門の面倒をみる、という活動がみられなかったことでわかる。家光が「十年は待つ」といったのに、そのことが活動にのぼらないのは、回復したとはいいながら、発病以前の状態には程遠いありさまであったためではないか。簡単な言いかたをすれば、頭のはたらきが鈍くなった、といっていいのではあ

るまいか。新設された山崎藩藩政を確立せねばならない身でありながら、このような状態になったことは、本人の不幸ばかりでなく、山崎藩自体、また、大きな不幸であった。

藩主がこのようになった際、藩内には新旧家臣団の対立、軋轢が年とともにひろがっていた。国家老伊木伊織を中心とする鉄砲組小頭石丸六右衛門、小川三郎兵衛ほか物頭十一人が古参組首脳として団結し、江戸家老小河四郎右衛門を旗がしらとして藩主側近の菅友伯、旗奉行別所六左衛門らが新参組の中心メンバーとなった。この両派の衝突が、寛永十六年（一六三九）七月はじめに勃発した。別所六左衛門妻女の貸金から起こったことであるが、さきに述べたごとく、この処理をめぐって両派の衝突がエスカレートし、しかも、藩主輝澄が友伯の言を信じて新参派の行動を是とする立場をとったことから、古参派の面々がおさまらず、このままに推移しては、一大事となることが心あるものには推測された。三十七歳になっている輝澄にそのことがわからないのは誠になさけないことであるが、だからといって、それを、そのまま放置しておくことは、とるべき道ではない。光政は、輝澄より六歳年下であった。しかし、このような考えから、叔父輝澄に忠言した。それは、「佞臣菅友伯をしりぞける」ことであった。

菅野物語（一）

菅野の由来

志水出世

菅野という地名はどこからでたのでしょうか。若西神社の由緒記によると古老の伝承として『須佐ノ雄尊がお若き時暴行をなされ御親神や諸神に放逐され賜うてこの山間まで来られた。しかし逐神は追って来なかったので路傍の石に御腰をかけておやすみになられ「我が心清々し」とのたまわれた。故に清野と名付けるようになった。しかし後年になって同郡内に「清野」という村名があったので「清」の一字を「菅」に替えて「菅野」と改めたという』となっています。

県下に菅野という所が数か所あります。岡山にもあります。お隣りの夢前町にも菅野村がありましたが、それについて播磨風土記（七一四年頃に完成）をひもといてみると「此処に菅原があったので菅生と号く」とあります。菅生という所も相生や、その他各地にあります。また新宮荘の辺の山のことを「菅が山辺に生え

ている。故に菅生と曰う。または品太天皇が巡行の時、井を此の岡に開いた。水が甚だ清く寒い。そこで水が清く寒いので、我が意もすがすがしと仰せられた。故に宗我富と曰う」とあります。さっきの社伝と似たところがあります。すげというのは、沼沢水辺に生える草で、昔は蓑や菅笠を作ったものです。今菅野川や林田川に一斉に生えているのは、つるよしで昔はよしとすげも同一視して、よしが今のように一面に生えていて、すげのが菅野になったのかもしれません。

播磨風土記に表れる山崎周辺の地名は、宇波良村（宇原）、川音村（川戸）、比良美村（平見）、比地里（上中下比地）、矢田村（？）、奪谷（？）、稲春（？）、高家（？）、都太川（伊沢川）、塩村（？）、柏野里（？）、伊奈加川（菅野川？）等です。

平安初期承平年間に出された和名類聚抄の中の宍粟郡の荘は、三方・高家・比地・柏野・安志・石作・伊和・土万の八荘で菅野の名は見えません。

応永十六年（一四〇九）九月、足利義持御教書に佐用郡上津方土万郷菅野村とあるのがここのことでしょう。町史には鎌倉時代（一一九二～一三三三）以降菅野荘とありますが、これは清水正健氏荘園志料昭和四十六年四月三十日発行からとられたものですが、出典がはっきりしません。たぶん十四世紀の中頃書かれた峰相記に『オケ（仁賢天皇）ヲケ（顕宗天皇）王子が宍粟郡に逃げ隠れ給えり、御所は当時のこう野市庭（高下市場）郡司は誰哉。菅野高家（高下）辺に有り』とあるので、ここから菅野庄という言葉が出たのでしょう。この話は記紀では三木市志染となっています。

江戸中期宝暦年中に書かれた播磨鑑によると『（法伝寺）法花宗一致派菅野谷栢野郷に在高下村京都本国寺末寺、また（塩田構居）塩田村』とあるので、江戸期には菅野谷と呼んでいたようです。

明治になると、第十六大区（宍粟郡）第二小区の中に山崎、加生、門前、青木、高下、市場、木谷、奥小屋、段、春安があり、塩田は第九小区にあります。

明治二十二年町村制ができ、塩田、青木、高下、市場、木谷、奥小屋が菅野村となりました。

食品の店
いまや
さつき通り4丁目
TEL ⑥2 0169

茶道衆談義

堀口春夫

お茶が一般社会で喫するようになるのは室町中期以後のことで、宋との貿易によって輸入が拡大されたからである。禅と結びつくのも、大徳寺の一休和尚に参禅した村田珠光が庶民的な下々の茶から出発し、これに貴族的な殿中の茶を加味し初めて精神的芸術的内容をもつ茶道を確立したからである。

また、侘び茶の元祖ともいうべき武野紹鷗や千宗易は精神的な落着きを持つその道の大家でもあったから、その頃は戦国大名の中にも茶に堪能な者はかなりあって、細川幽斉、細川三斉、高山右近、織田右楽斉などもその一人である。後には茶道を知らない大名は交際上恥をかくという有様になってきたので、名ある大名は競って茶道衆を抱えるようになった。

千利休が大閤秀吉に仕えたのも、秀吉の紹聘によったからで、いやこれは寧ろ仕えるというより茶のお相手をしたと言う方が妥当であったかも知れない。経済的にも裕福な利休は対等的な立場で指導したかも知れないが、しかしこれが後にはかえって秀吉から見れば傲慢と映ったのかも知れない。秀吉には、宋呂利新左衛門のお追従をいって駄洒落れの一つもいいながら差し出す番茶の方が性に合っていたかも知れない。即ち太閤持という語源の生れる所以でもある。

ところで茶道衆は仏門に入ったというわけではなかったが、一応皆頭を丸めていたので人々は蔭で茶坊主と言った。茶坊主の起りはもっと古くからもあった。即ち合戦に敗れた敗戦国の大将が降伏して頭を丸め戦勝国の大将の側近に侍べり話相手となった。つまりお伽衆と呼ばれるようになった。

一例をあげると佐々成政が秀吉に降伏して頭を丸め一時秀吉のお伽衆を勤めたことがある。成政は茶道の心得があったかどうかは知らないが、その後肥後熊本で五万石の大名に返り咲いたからお伽衆の間はほんの短期間であったであろう。

また昔より名君と称せられる大名には、かならずといってよいほど、お側坊主に才覚のあるしっかりした茶坊主が君側に居たといわれている。お側坊主は茶を汲み乍ら常に殿様のお話相手を勤めていた。つまり、お伽衆として、殿様は世の中の詳しいことに通じていないから、お坊主を介して世情を知るのが常であった。

したがって茶坊主は和歌、俳諧はもとより頓知がよく交友も多く、判断をあやまらない知識人でなければならない。普通の武士のように野暮な大小を腰に帯びず、堅苦しくなくて世間の人からもつき合いやすく気安さがあって人々の嘆きや、真実を聞くこともできたので、深窓の奥に住む大名達は皆茶坊主のユーモア味のある話ぶりで巷間のニュースを聞くのが楽しみの一つでもあった。

現代でいえば漫画家や評論家のような人が適していたであろう。昔からの有名な落首や狂歌、川柳は江戸城の茶坊主衆から出たものが多かった。お側坊主は、重臣会議や評定所には出ないが、最

後の決断を下す大名の意志を、茶を点じながら話の誘導によって左右させる黒幕的な存在にあったかも知れない。賢君にするのも暗君にするのも彼等お伽衆の手腕に待つところが多かったであろう。したがって巷の町人達はお側坊主に贈り物をして嘆願書ならぬ嘆きの吹聴を耳に入れて大名を動かす手段を考えていた。

ところが近頃の小説や芝居は茶坊主をまるで紅灯の巷の太鼓持と混同し殿様にお弁んちゃらの一つもいって、かっぽれや、チャリ舞いの踊りを見せる封間と間違えている。芝居では大身の旗本や殿様にお追従うを言って甘い汁を吸い面白おかしく暮らすいやらしい軽輩であるかのように見せているが、本当の茶坊主はそんな者ではない、なかなかの人物であったらしい。

殿様のお台子加番に選ばれる茶道衆をお側坊主といって、表坊主とは格式も違い熨斗目の着物に赤の袖無しを着て白足袋をはいている。数奇屋造りの茶室に詰めているが、表坊主は無地の着物に茶色の袖無し、お納戸詰の坊主と、時計の間詰めの坊主とあり、お納戸の茶坊主は御使者や客に茶を接待する。時計の間詰のお坊主は重臣の登城を告げたり、御用開始の太鼓を打ったり、時を告げたりする役である。また、掃除をする掃除坊主も居る。また、奥を勤めるお側坊主は非番の時には家中の子女に茶道や華道、行義作法など教える師範役もあった。

また、江戸城の茶坊主には年に一度宇治の茶を将軍家に献上する御用茶を運ぶ役があり、行列に従い大層な権威をふりまいたものであり、無礼があればお手打になるとか、茶壷が通る時は沿道の庶民も恐れをなして道を避けたとか、表の戸を締めたらしい。童べ唄にもある、ずいずいずっころばし、ごま味噌づい、茶壷が通るで戸ぴっしゃん……等々。

また、茶坊主は君側に侍べる関係もあって殿様のお気に召したらどしどし取り立てられて出世する人物もある。宋呂利新左衛門は秀吉から五万石をもらって大名格になったし、加賀騒動の張本人にされた大規伝蔵も初めは長玄といって前田吉徳に仕えた美男の茶坊主であったが、寵を得て次第に取立てられて、奉行になりついには家老にまで出世して名も大規蔵之允と改名した人物であるが、しまいには世継問題に首をつっ込み側室との不義の汚名まで着せられて、暗殺されるに至った。

薩摩の調所笑左衛門広郷は初め笑悦と名のる茶坊主であったが島津斉興に見い出され財政的手腕があったものと見えて、薩摩藩の元締となり、当時五百万両という大借財に困窮していた藩の財政を建て直した功によって、

仕置家老にまで出世するが、後にはお由良騒動に巻き込まれ斉彬派の誠忠組の藩士には嫌われ、また、砂糖きび栽培の酷使に農民からも嫌われ、藩の財政困窮を救ったものの、遂には密貿易の責めを負って自殺するという、あまり目ざましい出世も後には不幸であったかも知れない。

上町村宗門御改帳

久保寅夫

江戸時代切支丹信仰禁止令によって、各個人別に寺院の檀家である証明として、宗門改帳を毎年役所に提出した。山崎町宇野久保家の文書の中にある文久三年（一八六三年）の上町村の「宗門御改帳」の内、徳王寺（真言宗）の分を今回紹介します。真宗法華宗の分については、次回に紹介します。

文久三亥年　三冊之内壱番
尼ヶ崎領
真言宗人家御改帳
伊和組
三月　上町村

真言宗中ノ村
一徳王寺持高五石八斗

年五十七　庄屋　藤兵衛
年五十五　女房　きく
年三十三　娘　みね
年十一　女子　芳枝
同寺
年四ツ　男子　角治
家内〆五人内　男二人　女三人　牛壱疋
同寺
一徳王寺持高八石九斗
年四十八　年寄吉右衛門
同寺
年四十八　女房　やつ
年廿六　悴　定吉
同寺
同寺他領当郡三谷村年十九
庄兵衛娘当年来り

女房　ひて
同寺　年十二
吉右衛門悴　八百蔵
家内〆五人内　男三人　牛一疋
女二人
一徳王寺持高三石五斗
年廿八
丑左衛門組　堅吉
同寺　年廿二
妹　せん
同寺　年十八
弟　傅吉
同寺　年十三
同断　万蔵
同寺　年六ツ
妹　みよ
同寺　年四十七
母　そて
家内〆六人内　男三人
女三人
一徳王寺持高三石弐斗
年廿八
友吉　生子政五郎

同寺　年廿一
女房　もん
同寺　年三ツ
娘　たみ
家内〆三人内　男壱人
女弐人
一徳王寺持高三斗
年三十五
梶蔵
同寺　年廿七
女房　てる
年二ツ
生子　仲蔵
家内〆三人内　男弐人
女壱人
一徳王寺持高弐斗五升
年四十九
いち
年廿五
悴　嘉七
家内〆二人　男壱人
女壱人

一德王寺　萬右衛門株訳
当村清治郎娘当年参り
年十一　やす
家内ハ壱人女
家数合七軒　去戌御改後壱軒増し
人数合弐拾五人内　男拾弐人
女拾三人　牛弐疋

右者代々拙寺旦那ニ紛無御座候。依之旦那相改判形仕差上申候。若御法度之宗門と申もの御座候ハバ、拙僧何方迄も罷出急度申訳可仕候。為後日宗門手形仍テ如件

真言宗播州完粟郡船越山瑠璃寺末
同州同郡中ノ村
徳王寺

文久三亥年
三月
中嶋松治殿
吉原佐賀八殿

右宗門毎年強御改被仰付村中随分吟味仕、切支丹宗門之儀者不及申埒之者ニても一切無御座候。若疑敷もの隠置脇ヨリ相聞候欤訴人御座候ハハ如何様之曲事にも可被仰付候。一組之仲間互ニ吟味仕判形手形一紙指上申候。猶度々之吟味可仕候。為後日之一礼仍而如件

宍粟郡伊和組上町村
年寄　吉右衛門
庄屋　藤兵衛

文久三年亥年
三月
中嶋松治様
吉原佐賀八様

右毎年切支丹宗門御改強五人組判形并ニ寺請判形被仰付差上申候。少茂疑敷もの組下ニ壱人も無御座候も若疑敷もの隠置脇ヨリ訴人御座候ハバ私迄如何様とも可被仰付候。兼而。制詞被仰付候上は親子兄弟たり共囲申心毛頭無御座候。為後日之依而如件

大庄屋伊和
土居良右衛門

文久亥年
三月
中島松治様
吉原佐賀八様

真言宗
一家数合　七軒　去戌御改後壱軒増
同断
一人数合廿五人　内　男拾弐人
女拾参人

研修旅行に初めて参加して

柳田　弘

旅行の参加申し込みをして約十日後、旅行日を忘れかけた頃に「あなた様の乗車バスは三号車です」そして、乗車順番札のことなどが記された、ご親切な葉書を頂きました。五月二十日は、少し早いかと思いながら七時五分頃、集合場所の神姫バス待合所に行ったところ、すでに九分通りの方が座席に着いておられるのに先ずびっくりしました。

このようなわけで、一二八名は、岡山・広島をめざして定刻七時半に出発しました。今日は午後の降水確率が二〇％という気象台の予報が気になって、車窓から外を覗くと、一昨日までの雨で水量が増した揖保川に沿って、朝靄がかかり新緑がぼんやりと沈んでいましたが、竜野を通る頃には太陽が強く照りつけてきました。

山陽自動車道・ブルーハイウェイ等を経て、井原市の「嫁いらず観音」へと向ったのですが、私たちの三号車のガイドさんは、この春入社したばかりで目下研修中といったところでした。

まだまだ拙いところばかりでしたが、けなげな程、一生懸命頑張っていました。側で運転士さんが、案内の時期や内容を細かく指導されているのが聞こえて来て、「ガイドさん頑張れ!!」と励ましてあげたい気がしました。

一本松パーキングエリアで、十五分間の休憩がありました。よい天気でありながら靄で小豆島の遠望は不可能でしたので、売店で帰りの土産の品定めをしている方がたくさんありました。

十時二十分頃、最初の目的地「嫁いらず観音」(樋之尻観音院)に着きました。小高い丘の上の緑に囲まれた小じんまりしたお堂でした。院主から御説教を受けましたが、時間が短いこともあって、岡山弁の早口で少し聞きとれないところがありました。

要は、「自然(支配者は阿弥陀如来)に感謝し、信仰なさい。心も体も共に健康な生活をすることにより、痴呆症・中風にならず長生きが出来ますよ」と、私なりに汲みとって、ご朱印を頂きご利益の「年老いても、健康で幸福な生活を全うし、嫁の手を煩わすことなく極楽往生できますように」念じつつバスに戻りました。

この頃から、予定の時間よりずれはじめ、先に鞆甚会館で昼食をとってから、福山城に向いました。

領主水野勝成十万石が元和五年(一六一九年)に築いたこの城も戦災で筋鉄御門・伏見櫓だけを残

して焼失し、昭和四十一年に再建された鉄筋の天守閣の近代的な内部構造には、武将のたたずまいを想像することは出来なかったが、博物館として、古代から現代に至る資料が時代別に展示され、社会教育センターとして活用されていました。

城の最上階からの展望はすばらしく、築城主の雄大な意図が偲ばれ、また、地階の模型を見ると、その規模の大きさと共に、秀れた築城術に感心させられました。

三番めの尾道市の千光寺には、午後二時半頃に着きました。参道を覆う桜並木の下を、花時の楽しい情景を話しながらくぐり抜け、奇岩・大岩の間を縫うようにして、本堂に進みました。その途中、右手の尾道水道を中にした坂の町　尾道の美しい景観に何度も足を止めました。

聖徳太子の御作といわれる十一面千手観音菩薩を祀る本堂、断崖に建つ鐘楼を見て、客殿の左手を奥に進むと、そこから山頂にかけて「文学のこみち」に続いていました。

創業嘉永元年　きものと共に130余年
高級呉服の専門店
とくさや
山崎町本町（さつき通）
☎(0790)62-1680代

本堂までの道にも岩に刻んだ古歌・芭蕉の俳句などがありましたが、大部分は、この客殿から山頂にかけての、露出した花崗岩の岩肌に、尾道を訪れた有名な人たちの詩歌・小説の断章が刻まれていて、その一つ一つを読みながら進むと、ロープウェイの乗り場や、茶店のある山頂でした。

たくさんの碑の中で、なぜか大正末期にこの尾道市立高女で学び、「私は宿命的に放浪者である……」と、自負した林芙美子の「放浪記」の一節に、妙に心がひかれ遠く半世紀も前のことが次々と思い浮かんでくるのは不思議だった。

林　芙美子

海が見えた。海が見える。五年振りに見る尾道の海はなつかしい、汽車が尾道の海へさしかかると、焼けた小さい町の屋根が提灯のように、拡がって来る。赤い千光寺の塔が見える。山は爽やかな若葉だ、緑色の海、向こうにドックの赤い船が、帆柱を空に突きさしている。私は涙があふれていた。

（放浪記より）

茶店のかき氷で汗を押えて下山し、土産店で仲間と合流してバスに戻りました。

出発が少し遅れ四番めの西大寺は、時間的に無理ということで、バスは一路山崎めざして走りました。窓外には長閑な田園風景が広がり眼の保養をさせてもらった。

一本松パーキングからの四囲の展望は、また印象的だった。緑の波が打ち寄せるかのように、山なみが幾重にも重なり合い、そ

の向こうに夕焼雲が金色に映えて美しく、シャッターをきっている人がたくさんあった。

全員無事に山崎帰着は八時でした。

西国の歴史の足あとを、仲間との親交を深めながら訪ね、美しい自然にもふれることができて、心に残る楽しい一日になったことを感謝しています。

会長さんをはじめ、研修部の部長さん、役員さん、本当に有難うございました。

安井清介氏の逝去を悼む

堀口春夫

長年にわたり山崎郷土研究会の事務局を勤めて頂いていた、安井清介先生が、入院中六月五日逝去されました。入院中のことでしたので主侍医も充分手を尽されていたこととは思いますが、こんなに早く亡くなられようとは思っていませんでした。

去る三月総会の節は未だ全く気がつきませんでしたが、数日後私に「医者が入院せい言うのでなあー、一応入院するけど手術をせずにすんだら春の研修旅行までには帰れると思うから、それまで事務局の代わりを勤めてくれないか」と頼まれました。私もその時はあまり気にも懸けずその言葉どおり引き受けました。

前に心臓の手術という大病を克服されて退院された先生だけに、風邪をこじらせたぐらいで、すぐ全快されて退院されることと思い、お大事に、と一応書類は受け継ぎました。退院したら又すぐ引き続きやるからという言葉を信じて……。

ところが、その後の便りでは手術はしないが一寸ばかり長引きそうだというので、私も春の会報の仕上がりも少々遅れておりましたので、会報の仕上がりを待ってその一部を持って副会長二人を誘ってお見舞いにあがりました。

先生は多少やつれておられたが、咳が頻繁で話がしにくい様子でした。私は気管支喘息かな、と思いました。私も過去に気管支炎をわずらった経験がありますので、これは少々長引くと思いましたので、会報も旅行のことも順調に進んでいるから御心配なく、と言ってその後の計画を相談し、あまり長居はかえって体にさわってはと遠慮して退去致しましたが、その後会費の徴収や旅行の受け付け等は会員の皆様方の御協力により順調に進みました。

しかし、それでも安井先

外科・内科
山中医院
院長 山中陽一
山崎町西町・TEL⑥②0036

生は旅行のことが気懸りと見えて電話をかけてこられました。先生の責任感の強いのには感心致しました。お蔭様で五月二十日の旅行は快晴に恵まれ順調に経過し終ることが出来ましたので、またその由を便りに先生に知らせました。先生は安心された様子でしたが、それから間もない日に先生の訃報に接し全く驚き入りました。

私はしばし途方にくれました。春の旅行という行事は終ったものの郷土研究会の事務局の欠員ということはなかなかむずかしい問題だけに、心配致しました。と同時に安井先生がよくもこの複雑な世話のやける旅行の世話を長年してこられたことに改めて敬服致しました。

思えばこの郷土研究会の歴史は古く昭和初期の頃から、郷土研究会育ての親とも言うべき人、安井寅一氏、俊二氏親子の尽力はひとかたならず、その間、多少の盛衰はありましたが、一時戦事中途切れそうにもなりましたが、安井俊二氏親子や島田清先生の梃子入れで又復活し、その後ずっと継続して来られました。

私も昭和三十三年入会して、それ以来の経過は良く知っておりますが、会報も初めは安井俊二氏が一人で引き受けてやっておられましたし町史編集の折には夜おそくまで原稿を書かれ、かえって体を壊され町史完成を見ずして亡くなられました。

安井俊二氏亡き後は前野四郎氏が会長となられ、会員の皆で協力し懸命に会をささえて来ました。また町史編集は歴史研究専門の諸先生方の尽力により昭和五十三年完成致しました。その間、研修旅行も年二回は休むことなく続けて来ました。また各部会が伊藤親保先生の肝煎りで誕生し部活動により会報も史跡の石柱等の建設も続けて来ました。

多少の衰退はありましたが安井清介氏が校長退職後事務局を一人で引き受けてくれまして、会員もどしどし増えて倍近い人数になりました。会長は元会計事務局だった入江静夫氏となり研修旅行もバス三台ぐらいが普通となりました。日帰り旅行では四台になったこともありました。そしてまた三年程前からは、旅行先も近くは行き尽しましたので、日が短い秋季には泊りがけの旅行となりました。

距離もずっと伸びて木曽路と信濃路の旅は泊りがけでもバス三台となり、安井先生もはりきってバスの中では「木曽路の女」の歌詞をプリントして配布され、先生の指導で皆一緒に合唱したことは、今だに忘れられない思い出の一つとなりました。安井先生

本のある生活を——

さつき書房

山崎町鹿沢 55-3
☎(0790) 62-4674

の乗ったバスはいつも帰りは歌がよくはずんだものでした。
もっと永く生きてもらいたかった。本当によくお世話になりました。先生自身も旅行の好きな会員から先生先生と慕われていることが生きがいを感じておられたことと思います。今となっては郷土研究会の旅行は、やめられない行事の一つでもあり、また郷土研究会は安井氏親族で育てられてきたといっても過言ではないと思われます。

安井清介先生と私は同級生でもあり、昭五会同窓生のためにもよくお世話をし、骨を折ってくれました。歴史と旅行の好きだった安井清介君、本当に有難う。君はあの世でもきっと、故人となった郷土研究会の人々を集めて旅行会を組織し楽しく歌いながら旅行をして行くことであろうと想像し、私達一同共に安井清介君の御冥福を心より祈るものであります。

☆郷土研究会の皆様、安井清介先生の奥様—安井つる代様より、一金十万円也を、主人供養のためにと山崎郷土研究会へ御寄贈下さいました。ここに謹んで皆様にご披露申し上げます。

史跡部だより

今年度は、山崎町下町にある磐座（いわくら）。下牧谷の石水山奥院に標柱を建てます。標文は次のように考えています。

磐座（いわくら）

山崎町下町

通称権現さんと呼ばれている岩石神社のご神体は、石段を登って正面の社の背後にある。およそ十メートルもある磐座（立石）であって、全国的にも珍らしい磐座である。磐座は神の座、神を祀る場である。起源は古墳時代以前水田稲作を始めた、弥生時代の信仰の場である。その時代の水田は現在のような平野にあったのでなく、山地の端や、細長い谷や、丘陵地に挟まれた谷間にあった。通称権現さんと呼ばれているが、修験道が開かれた神仏習合になってからのことである。

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします
神姫観光
〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
（神姫バス山崎待合所内）
TEL (0790) 62—7588
FAX (0790) 62—7589

古くみて千二百年前、磐座の信仰はそれから千年前に始まる。岩の偉容は変っていないのである。現代に至っても、それを祀りつづける民衆の誇り得るところである。

石水山奥の院（通称 観音さん）

山崎町下牧谷

石水山奥の院は、真言宗石水山金蔵寺という寺の奥の院にて、御本尊は正観世音菩薩である。聖武天皇の御代神亀年中に、行基によって開かれたという。

金蔵寺は天正八年に長水合戦の際、焼失した。その後、延享元年甲子に再建されるが、寺屋敷跡は畑や住宅となる。

奥の院には、高さおよそ七メートル、幅十六メートルの大磐石に穴が三つあり、その中に聖観世音菩薩が安置され、霊験あらたかな仏であると、信仰されている。岩間から流れる水は、かんばつの時であっても、枯れることなく湧出している。

表装全般 …古いものを大切に…
表具師 松本永春堂
山崎町鹿沢本通り
TEL. 62－0122

大雲寺の棟瓦

平成二年八月、山崎町寺町の大雲寺本堂建て替えのため、本堂取り壊しがされたところ、大屋根棟の鬼瓦に次のような文字が刻まれていた。

山盲　延宝八庚申暦初夏吉辰
瓦師　播州完栗郡上寺村
清水氏長兵衛尉正家　正造

棟の南北に陰陽二つの鬼瓦が上がっており、北向の鬼の額には三日月形、南向の鬼の額には太陽の形がある。延宝八年（一六八〇）と言えば本多肥後守忠英が、和州郡山城より移封された翌年に当たり、その年に寺が建てられたものか、あるいは屋根替えだけされたものかは不明であるが、とにかく山崎町内では一番古い建築物ではないかと思われる。軒先にあった鬼瓦は、天保十五年三月吉日、於上寺村瓦師忠左衛門とある。これはその頃一部屋根の葺き替えがあったものと思われる。

事務局だより

永らく山崎郷土研究会の事務局長を勤めて下さいました安井清介先生が去る六月五日亡くなられましたので、その後任選考のため先般役員会を開き、種々相談の上、役員互選の結果、山崎町出水町四一六　柳田弘先生に決定いたしました。

先生は元城下小学校長を勤めておられた方で、先年退職され、歴史研究にも御熱心なお方とも承ります。会員の皆様、よろしく御承認下さいますよう紙面を通じて御紹介申し上げます。

堀口春夫

私こと

このたび事務局をお受けすることになりました。何分にも、永年小中学校教育にかかわり、これから、社会勉強をと、思っていた矢先でございます。微力者でございますので、皆様のご指導、ご協力の程よろしくお願いします。

柳田弘

楽しいくらしのお手伝い
ホームセンター
アクロ
竜野店
竜野市竜野町富永
☎(0791 3-3226(代)
営業時間AM10:00～PM7:00
(定休日) 毎週水曜日
山崎店
宍粟郡山崎町今宿
☎(0790)62-2434(代)
営業時間AM9:00～PM7:00
(定休日) 毎週水曜日

株式会社

安井書店

宍粟郡山崎町山崎90
ＴＥＬ山崎㊷0700(代)

最新型カラー現像機導入
カラープリント・スピード仕上げ

兵庫県市町村職員共済組合指定店
良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop
コーエーカメラ
宍粟郡山崎町東鹿沢26－3 ☎62－2089